

在宅障害児における療育上の問題への支援：母子短期入所を通して

(分担研究：発達的な観点から見た療育指導の在り方に関する研究)

分担研究者 小西行郎¹

研究協力者 栗原まな²、中江陽一郎²、熊谷公明²、小川喜道³

要約：

当センターで行っている在宅精神薄弱児短期入所（母子短期入所）事業における支援状況（特に小児科医とリハスタッフの役割）、家族のかかえる問題点について検討した。対象は平成8年度に母子短期入所（4泊5日）を行った73例で、対象児の大半は精神遅滞児であった。指導内容としては障害受容・対象児の状態の理解・対応方法・養育環境の問題などであった。小児科医は児の診察・医療相談・母親の集団指導、リハスタッフは言語相談・心理相談・機器の紹介などを行った。幼児では比較的障害の軽い児の受診が多く、診断のはっきりしない中で専門機関を巡り歩く例が目立った。学童では不登校や暴力の相談が多く、福祉と教育の問題が絡んでいた。その他兄弟姉妹への影響が強く感じられた。

見出し語：在宅障害児、療育支援、短期入所

はじめに：

当センターは、県から2病院、6福祉施設、研究・研修所および看護学校の管理、運営等を受託し、身体障害者、精神薄弱児者、老人など心身に障害を有する人々に対し、医学、心理、社会、教育、職能等の面から、治療、総合評価、支援、訓練等を行い、さらに地域福祉医療への協力を行っている。

その一貫に、「地域福祉対策事業」があり、その中で最も力を入れている精神薄弱児短期入所（母子短期入所）母子短期事業の概要について昨年度は報告した。

本年度はさらに母子短期事業における支援状況（特に小児科医とリハスタッフの役割）、家族のかかえる問題点について検討を加えた。

研究対象および方法：

母子短期入所は、在宅の精神遅滞児およびその保護者を共に短期間入所させ、児童の行動観察および指導を行い、

さらに保護者に対して、精神遅滞児を正しく理解するための相談、助言、指導を行うことを目的としている。小児科医を中心として、表1に示す多くのスタッフが関与し、児と保護者の個別または集団指導を実施している。4泊5日の入所を原則としているが、過去に入所した例のフォローアップ入所は1泊2日としている。

対象は、平成8年度、地域巡回指導により、地域の各施設を通して入所した73例である。

方法は、対象児の疾患内容、入所の目的となった相談内容、小児科医およびリハスタッフの具体的な支援内容、家族のかかえる問題の概要、兄弟姉妹の問題、フォローアップ入所の状況（4泊5日入所で得られた内容の確認）について検討した。

1) 福井医科大学小児科 (Dept. of Pediatrics Fukui University)

2) 神奈川県総合リハビリテーションセンター-小児科

(Dept. of Pediatrics The Kanagawa Rehabilitation Center)

3) 神奈川県総合リハビリテーションセンター-地域福祉課

(Dept. of Community Based Rehabilitation

The Kanagawa Rehabilitation Center)

結果：

1. 入所回数、参加児者数

4泊5日17回73組、1泊2日入所9回41組、合計26回114組の入所を実施した。

2. 対象児の疾患内容（表1）

疾患名	例数
精神遅滞+自閉症	26
精神遅滞	20
発達障害の疑	5
ダウン症候群	5
精神遅滞+てんかん	4
精神遅滞+奇形	4
その他	9
計	73

3. 入所の目的となった相談内容（表2）

相談指導項目	件数	相談指導内容	件数 内訳	年齢層別件数					
				0 3	4 6	7 9	10 12	13 15	16 18
行動観察評価	11	行動観察等による総合評価		3	5		1		2
身辺処理指導	4	食 強度の偏食の改善指導			2				
		事 スプーン操作等の訓練	2		2				
		排泄・排便の訓練指導	2		1		1		
		睡眠等生活リズムの改善							
行動上の 問題の改善		他傷行為の軽減							
		多動への対応							
		無断外出への対応							
障害の 理解促進	13	子供の状態の理解と、対応方法の指導		5	5	2		1	
障害受容プロ セスへの援助	31	障害受容プロセスへの援助		8	14	1	5	2	1
退路退遇相談	4	退路選択相談	4		1	2		1	
		保育園入園に関する相談							
養育環境の 相談	10	兄弟に関する相談	7	2	5				
		その他	3			2	1		

4. 関与スタッフ（表3）

・小児科の関わり：初日の入所時の個別医療面接にはじまる。病歴の聴取、入所児の身体・健康チェック、入所目的、

母親からの相談に対する返答などを行う。その後、3ないし4日に母親集団指導を行う。約2時間かけて行うが、内容は疾患や障害児の扱い方についての講義、質疑応答である。

相談内容は様々であるが（表2）、平素受診している医療機関では聞けなかったことについての相談が多い。個別の内容ではあっても、集団指導の中で質疑応答し、それぞれの母親の役にたつよう工夫している。入所後当科外来でのフォローを開始する例もあるが、ほとんどは地域でのフォローにつなげている。

・言語科：言語発達についての理解を深めることにより、児の基本的な指導方法について母親集団指導で助言をしている。

・心理科：入所児の指導、処遇上の方法などについて、担当者に助言、指導をする。心理的治療、集中訓練などが必要な児に対しては個別指導を行う。

・地域福祉課：障害受容、障害の理解促進に対する指導が最も多いが、行動面の評価と身辺処理指導（特に排泄指導）も多い。障害児をもつ母親が集団で5日間寝食をともに過ごすということは、障害受容、障害の理解促進の面から非常に有益であり、5日間の入所を終えた後、母親同士のつながりが続くことが多い。

科	スタッフ	事業名	科 目
地域福祉課	地域福祉課員 ・7人	全事業に関与	地域福祉事業全般
小児科	医師・3人	家族一日入所	講演と医療相談
		家族短期入所	初日スクリーニング 母親集団指導
言語科	言語療法士・ 2人	家族短期入所	個別言語相談
心理科	臨床心理士・ 3人	家族一日入所	講演と療育相談
		家族短期入所	心理相談、助言
看護科	看護婦・3人	家族短期入所	身体計測、健康管理

5. 家族のかかえる問題の概要

- ・ 幼児期：比較的軽い障害児の利用が増加。診断のはっきりしない状況、将来への不安、母子の孤立化、専門機関を巡り歩く傾向が目立った。
- ・ 学童期：不登校、暴力の訴えが多かった。幼児期から抱え込んで養育している母に多く、福祉と教育の連携の必要性が感じられた。

6. 兄弟姉妹の問題（表4）

付き添い兄弟姉妹26例中、状態が気になる20例の問題点を示す。

年齢	性別	対象児	気になる状態
元	6才	男(3才)	登園しぶり・少食・心因性嘔吐
	6才	男(3才)	寝込み多い・少食
	7才	男(4才)	感情抑制・心因性嘔吐
	9才	男(5才)	感情抑制・過剰適応
姉	5才	男(4才)	注目行動(反抗)
	5才	男(3才)	感情抑制・夜尿・遅眠
	6才	男(5才)	情緒面のゆさ・発達の違い(?)
弟	3才	女(6才)	感情抑制・片親児への拒否感
	1才	男(4才)	発達の違い
	1才	男(4才)	言葉の違い
	2才	女(5才)	感情抑制・頑固
	2才	女(4才)	強い分離不安
	3才	男(3才)	注目行動(反抗)
	3才	男(6才)	感情抑制・過剰適応
母	3才	男(6才)	感情抑制・過剰適応
	1才	男(4才)	家庭内事故による発達の違いの心配
	1才	男(3才)	発達の違い
	2才	男(5才)	感情抑制・嫉妬
父	3才	男(3才)	強い分離不安
	4才	男(6才)	登園しぶり・少食

考察：

地域福祉課は昭和54年に設置され17年を経過する。心身障害児者の在宅福祉の向上をめざし、事業が展開されてきた。近年ますます在宅での療育の重要性が強調されるようになり、本事業の役割が再認識されてきている。

母子短期入所の対象は就学前が約7割を占め、大部分が精神発達遅滞を有し、それに伴う行動上の問題や身辺処理の指導を希望して入所してくる例が多かった。しかし実際の指導内容では、それらの指導より、障害受容、障害の理解促進に力がいれられていた。

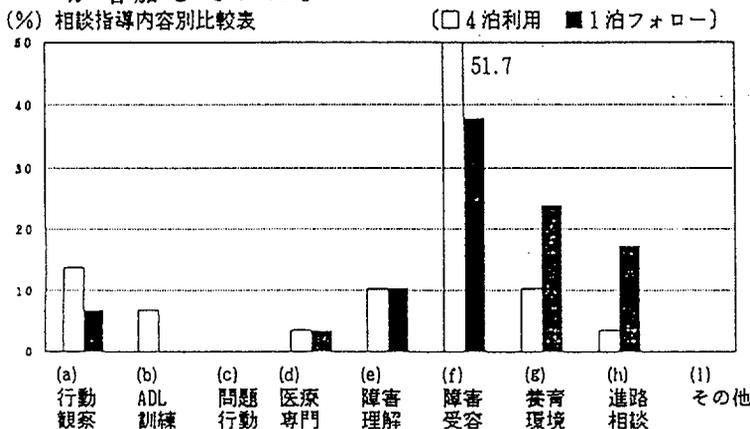
指導に関与するスタッフは地域福祉課を中心として小児科、言語科、心理科、看護科と多職種で、それぞれの対象児に適した対応が可能であること、また短期ではあっても寝食を共にして生活することにより障害児の母親同士の連帯感が生じることから、短期入所は退所後の療育指導に非常に役立っていた。さらに障害児のみでなく家族のかかえる様々な問題、特に兄弟姉妹の問題についての対応も今後検討を続けていく必要が大きいと思われた。

母子短期入所はこうした対象児を取りまく家族や関係者に対する援助の要請が特徴であり、在宅療育の一助となっている。

7. フォローアップ入所の状況

(図1)

4泊5日の短期入所後、概ね2-3カ月後に1泊2日の入所を行ってフォローを行っている。今回利用した29例の相談指導内容を4泊利用時と1泊フォロー時で比較した。1泊フォロー時には障害受容の相談指導が減り、養育環境や進路相談が増加していた。





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:

当センターで行っている在宅精神薄弱児短期入所(母子短期入所)事業における支援状況(特に小児科医とリハスタッフの役割)、家族のかかえる問題点について検討した。対象は平成8年度に母子短期入所(4泊5日)を行った73例で、対象児の大半は精神遅滞児であった。指導内容としては障害受容・対象児の状態の理解・対応方法・養育環境の問題などであった。小児科医は児の診察・医療相談・母親の集団指導、リハスタッフは言語相談・心理相談・機器の紹介などを行った。幼児では比較的障害の軽い児の受診が多く、診断のはっきりしない中で専門機関を巡り歩く例が目立った。学童では不登校や暴力の相談が多く、福祉と教育の問題が絡んでいた。その他兄弟姉妹への影響が強く感じられた。